

令和2年（2020年）9月4日

第2回都市マネジメント懇談会 会 議 要 旨

事 務 局

都市整備局都市計画課

第2回都市マネジメント懇談会 会議要旨

1 開催日時

令和2年（2020年）9月4日 14時00分

2 開催場所

広島市役所議会棟4階全員協議会室

3 出席委員

渡邊委員（座長）、田中委員、神田委員、フंक・カロリン委員
木原委員、平尾委員

4 傍聴人

一般 2名
報道関係 1社

5 閉会

16時00分

【配付資料説明】

事務局から委員の変更、都市マネジメント懇談会の内容について説明

【話題提供】

（木原委員）

・「拠点地区のあり方 ～西区 横川を通して～」を説明

（平尾委員）

・「学びをキッカケに街と関わる ～ひろしまジン大学の活動～」を説明

【意見交換】

[持続可能な組織]

(神田委員)

- ・横川やジン大学は行政とは、どのように関わっているのか。
- ・動かしている人がいなくなっても活動が止まることはないのか。

(木原委員)

- ・実際に動かしているのは、商店街振興組合の方々が中心となっている。また行政頼りではなく、横川のみなさんが自主的に進める中で適宜相談(協力要請)しながら進めている。

(平尾委員)

- ・ジン大学は、NPO法人として運営しており、収入の7割程度は行政からの委託事業による。
- ・このNPOは、プラットホームとしての側面が強く、活動に関わった人たちが自ら街や地域に関わったり、自身の活動を起こしたりということに繋がっていきたいと思っている。そんな人どうしの繋がりづくり、仲間づくりも意識している。そういう意味で、ひろしまジン大学の活動が止まったとしても、そこで生れた活動はあちこちに広がり、続いていくと思う。

(フंक・カロリン委員)

- ・都会は人の入れ替えが激しい状況であっても、地縁が活動の中でテーマとなるのか。
- ・自分はこの地域に住み続けたい、何かやりたいと思うようにアイデンティティを作ることを視野に入れているのか。

(木原委員)

- ・地縁については、昔からいる人も外から来た人も一緒になって取組に関わっており、エリアとしてプラットホームになっているような感覚である。
- ・アイデンティティに関しては、商店街の方々は、横川のファンになってほしいということと横川に住み続けてほしいという思いを持っている。

(渡邊座長)

- ・横川は、支援団体というかプラットホームになっていることが分かりやす

いが、ジン大学はそのあたりどう考えているか。

(平尾委員)

・ジン大学は、23市町280万人とエリアが広すぎて、特定の地域に愛着を持つのは組織としては難しいと思う。一方、縦軸である地縁に対して、横軸であるテーマ縁や趣味縁は作っていけると考えており、そのような横軸でつながった人たちを地域の人たちと関わりながら縦軸に落とし込んでいくことを目指している。

・ジン大学のモデルは比較的都市部エリアと相性のいいものだと考えているが、忙しい日々の中で、授業（学びの場）という非日常から、普段住んでいる足元の地域や当たり前の日常に改めて目を向けてみるというのは、地域や自身を見直すために非常に有効な手段であると思う。そしてそこで終わらずに、参加した人たちを参画者にしていく仕組みも必要だと考えている。

(田中委員)

・色々なことがボトムアップで起こっている状況だが、どうしても計画には上から下の方向性も求められるように思うが、その折り合いはどうつけているのか。

(木原委員)

・横川がボトムアップな都市の今後のあり方を示すとすれば、有機的なつながりの中で地域の課題を解決していくマネジメント志向を持った組織が、上下のずれをうまく調整するような中間組織団体として機能していることだと思う。

(田中委員)

・ジン大学は、愛着を持った方をどんどん作り、地域で活動する人が増え、様々な活動が展開されているとのことだが、ジン大学としては、どこまでを範疇として考えているのか。

(平尾委員)

・私たちは、街や地域に対して受け身だった人が、主体的に関わる人に変化していくような、そんな場でありたいという思いがあり、長期的にはみんなで考えて、みんなで決める私たちのまちを、いかに体現するかが大事だと思っている。

- ・ジン大学の機能をまちという視点で見たとき、私たちの活動はそこに根差して動き出す前の「耕す」段階だと思っており、目を向けなくなって硬くなっている地域という土壌を、しっかりと耕し、種を植えたらよく育つようなやわらかい土にしながら、このまちは何かできるんじゃないかなというワクワク感を作り出すなど、初期の初期を担えている。

- ・人を集める時に有効なのは、何らかの学びの場を提供して、そこで学んだ人が結果、学んだことを活かしてスタッフになるという流れである。

[傍聴者からの意見]

(傍聴者)

- ・横川駅でのイベントの目的は、駅を利用する横川住民ではない方に、また来てもらい消費を促すことか、横川住民に地域のよさを再認識してもらうことのどちらか。

(木原委員)

- ・駅前では通行される方も多いので、そういうところで各種イベントをやっていけばにぎわいにつながっていくという思いはある。

イベント実施の目的は、住民に魅力を再発掘してもらいたいことと、それを発信し、横川に魅力を感じて集まってきてもらいたいという両方である。

(傍聴者)

- ・横川での取組の中で出てくる「にぎわい」と「やわらぎ」というキーワードの中身や方向性は、具体的にどのように決めていくのか。

(木原委員)

- ・エリアマネジメント連絡協議会の中で、横川のあり方や理想像についての対話のなかで決めるというより、現在そこにたどり着いているという方が正確だと思う。

[ウィズコロナのまちづくり]

(渡邊座長)

- ・コロナ禍で集まることができず、ストップしている事業もあり停滞感がある。そういうウィズコロナでの活動で苦労していること工夫していることは

あるか。

(木原委員)

・ウィズコロナでの活動では、当初は完全に停滞したが、商店街の方々もオンラインへの抵抗がなくなってきており、最近では会議もリアル会場とオンラインのハイブリッドで行っている。

・コロナ前に横川の理想像やビジョンについての対話ができている、新しい生活様式への適応も、理想像やビジョンの達成や実現への線上に乗っていると捉えながら取り組むことができたため、地域の活動も再開できたのではないかと思います。

(平尾委員)

・ジン大学は、私たちが「先生」と呼ぶ、様々な人たちが活躍、活動しておられるまさに「現場」に行き、授業をし、その場の空気自体も体感してもらうのが特色の一つだった。それがコロナ禍で現場に行くことが難しくなってきたら、基本、オンラインで実施している。

その結果、よかったことは県外や海外から参加する人がいるなど、時間や場所を越えて展開できるようになったことであり、難しいと思ったことは、五感で感じられないため、何らかの空気感や「ノリ」と呼ばれるものを作ることである。オンラインでは非言語の部分での限界を感じるがよくある。

[拠点づくり]

(神田委員)

・拠点をいかに作るのかという観点がここ最近の日本や広島のまちづくりの中で意識が抜けていたのではと思う。

・日本のまちができた経緯を考えていくと、拠点を位置付けるという行為があったと思う。最近の計画でこういうのを見ないというところがあり、ボトムアップでのまちづくりの1つのゴールというのは、拠点をつくるということにあっていいと思う。

・計画に書けば位置付けかもしれないが、自他ともに認められる状態を作ればいいと思う。何か強く皆さんが意識すると非常にいいまちになり、行政はそこに乗っかり、計画にその地域を位置付ければいいと思う。

- ・今のタイミングでの拠点について改めて共通認識を持っておく必要があると感じた。

- ・ハードとしての拠点とソフトとしての拠点があり、これまで都市計画はそれを分けて論じられてこなかった。

(フंक・カロリン委員)

- ・逆に分けて論じれるかという面も少しある。現在の拠点でもイメージがつく場所とそうでない場所がある。例えば、横川だとイメージがつき、ハードでは、駅があり、駅前に広場があり、広場の隣にショッピングセンターがあり、その中にも広場がある。さらには商店街があり、川があり、川があると緑地がある。ソフトでは、レトロというイメージがありプラットホームがあって活動があると拠点になっていくという、ハードとソフトをいかに結び付けるかということこそ拠点をつくること。ハードとソフトを結び付けて、そこにイメージを形成してということだが、そういうイメージは、ころころ変わるものでは意味がないので、時間をかけて作っていかないとけないと思う。

(渡邊座長)

- ・交通結節点といわれている交通が便利なところは拠点になりやすいことは間違いないし、計画論的にもそう位置付けている。一方で、拠点だけど、どういう拠点かよく顔が見えない拠点もあるという中にあって、横川はすごく頑張っているという気がするし、そういうところでの人づくりだったり、もう少し広い展開をジン大学ではやっているのかなという気がする。

(田中委員)

- ・第1回では、ヒートアイランドのような物理現象から考えた時にこういうまちがいいという話があり、それを実現するために多くの人に理解してもらうためには、プラットホームが必要という話をしたが、そういうプラットホームは、ボトムアップの積み重ねの上にあって、さらにそのボトムアップには人をつくるということが前にある必要があるということが本日は体系的に整理された。前回と今回の話が体系的に整理され、非常にすっきりした気がする。

[まとめ]

(渡邊座長)

- ・本日の議論を4点にまとめていきたい。
- ・1点目は、拠点の話であり、広域的な拠点は、宇品・出島は港湾拠点とか商工センターは流通、商業とかキャラクターをはっきり市の方でも書いているが、地域拠点の方は生活サービス機能という言い方であり、生活サービス機能の深掘りができていなかったかなと思うので、生活サービス機能ってどういうものを提供していくのかを整理しながら考えていくと、もう少し拠点の顔が見えてくるといったことである。
- ・2点目は、プラットホーム論であり、地域の意味や地域アイデンティティなどを学ぶ中で自分自身の新しい経験が出てきて、このまちで育てられたというところにたどり着くと、ソフト的にも充実した拠点になると思ったことである。
- ・3点目は、ソフトの中身は行政や識者からの提供でなく、みんなでつくるものである。地域の価値をみんなでつくっていきこう、新しい価値をつくっていきこうというように、マーケティングの世界での企業がユーザーと一緒に新しい商品をつくっていく価値共創と一緒に、まちづくりが価値共創の時代になっており、特に地域拠点ではそういった必要性がすごくあると思ったことである。
- ・4点目は、マネジメント志向であり、民間企業は経営理念に基づいて利益を出すよう活動しており、まちづくりも色々な計画はあるけど、やっぱり地域の理念や特徴があり、それで地域を動かしていくことが必要で、トップダウンでなくボトムアップでのまちづくりを行うマネジメント志向の都市計画が必要だと思ったことである。
- ・私は、この4点にまとめたが、皆様から意見はあるか。

(神田委員)

- ・ある程度のハードを見越してこちらに導くということも必要で、全てがソフトだけではうまくいかないの、投資すべきところは投資すべきという基本スタンスは必要だと思う。

(渡邊座長)

・公正公平な都市基盤施設のシビルミニマムはもう終わったので、これから次のステップとして、頑張っているところに投資することもいいのではという気がしており、地域間で競争してもらい頑張っているところに投資することでもいいのではと思う。

(フंक・カロリン委員)

・拠点を考えるなら拠点にある程度の資金を与えて、市民はどういう活動をするか自分で選んでそこにお金を投資してくださいとか、そういった予算が拠点の個性を出すには必要であり、それが全て成功するわけではなく結果がないものも当然出てくるけど、それがないと動かないと思う。

(平尾委員)

・ビジョンはとても大事であり、何を目指すかという大きな絵は大切だが、そのために人が手段化されてはいけないと思う。ビジョンを描いたので、そのために皆さん頑張らしましょうという「ビジョンありき」ではなく、皆さん自身が何をするか、「ひとありき」の側面も大切にしていきたい。とはいえ、この辺はバランスなので、絶対的な正解はないと思う。

まちづくりは、まちを作り上げていくために人が関り、話し合い、動いていく、そんな過程にこそ大きな意味があると思う。

(神田委員)

・まちづくりは研究と同じで、結果が予測できるものではないので、変なお金の使い方をしてはいけないと思うが、その過程で気付くことは多くあると思う。

(渡邊座長)

・拠点をつくるために助成金をどんと出し、拠点の顔をつくっていくような新しいまちのソフト的な取組に対する助成や仕掛けをつくってもいいと思う。

・地縁のまちづくりはもちろんあるが、テーマ縁というかも少し拠点でのまちのあり方を考えることは、まさしく横川やジン大学で行っている取組であり、そういった取組がこれから大変重要であり、それがないと本当に顔のない拠点になってしまうと思う。